



TITLE:

大「ザフエーナ」 静脈歸流部ノ稀有ナル異常

AUTHOR(S):

喜多, 豪

---

CITATION:

喜多, 豪. 大「ザフエーナ」 静脈歸流部ノ稀有ナル異常. 日本外科宝函  
1930, 7(4): 568-570

ISSUE DATE:

1930-07-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200561>

RIGHT:

# 大「ザフエーナ」靜脈歸流部ノ稀有ナル異常

京都帝國大學醫學部解剖學教室

喜 多 豪

## Eine seltene Varietät der Einmündungsstelle der V. saphena magna.

Von

Dr. O. Kita.

(Aus dem anatomischen Institut der Kaiserlichen Universität zu Kyoto.)

Der Verfasser beobachtete eine eigentümliche Varietät der Einmündungsstelle der V. saphena magna an einer 75 jährigen weiblichen Leiche beiderseits. Die Vene schiebt sich nämlich von der lateralen Seite der A. femoralis schräg hinter diese Arterie und mündet in die laterale Seite der V. femoralis ein.

In der Literatur, abgesehen von 2 Fällen der Japaner von B. Adachi, befindet sich kein Bericht über eine derartige Varietät der V. saphena magna an den Europäern vor (Autoreferat).

〔内容抄録〕 著者ハ75歳ノ1女性屍ノ兩側ニ於テ大「ザフエーナ」靜脈ガ股動脈ノ外側ヨリ其ノ後側ヲ經テ股靜脈ノ外側ニ開口セルモノヲ見出セリ。斯カル破格ニ就テハ今日マデニ報告セラレタルモノ極メテ少ク僅カニ足立教授ノ2例(日本人)アルノミナリ。

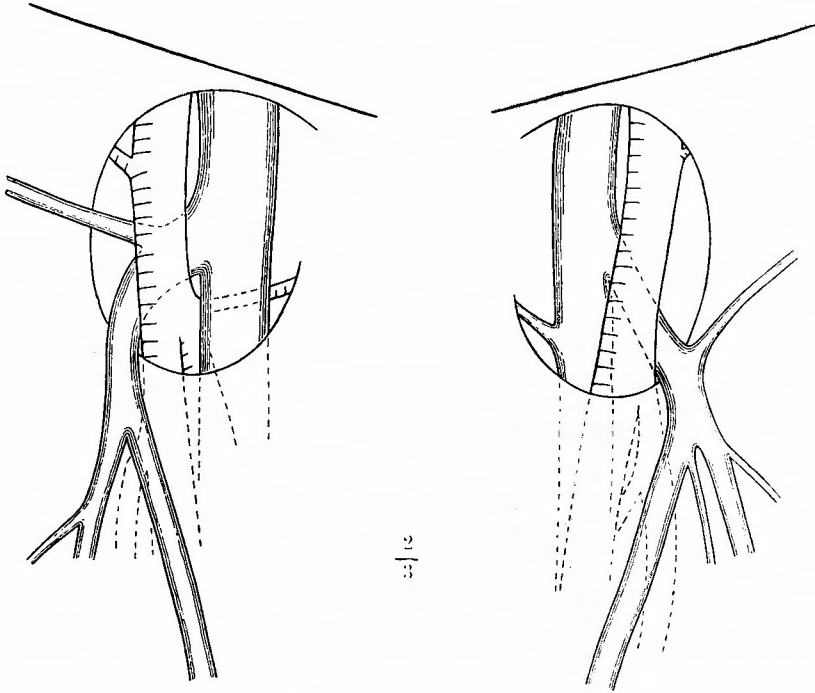
大「ザフエーナ」靜脈ハ大腿卵圓窩内ニ於テ股靜脈ニ開口ス。而シテ其ノ開口側ハ股靜脈ノ前側又ハ内側ニアルヲ常トス。然ルニ余ハ昭和4年10月偶々當教室解剖實習室ニ於テ其開口ノ稀有ナル異常ヲ1女性屍(75歳、屍體番號8453)ノ兩側ニ於テ見出センヲ以テ茲ニ之ヲ報告スベシ(靜脈管ニハ注入ヲ施サズ)。

右側 (第1圖) 大「ザフエーナ」靜脈ハ鎌狀緣下角ノ稍々下方(鼠蹊韌帶下約6,9糎)ニ於テ副「ザフエーナ」靜脈ト合シテ1幹トナリ、次イデ股動脈ノ外側ヨリ其ノ後側ヲ斜メ内上方ニ走り、鼠蹊韌帶下約3,7糎(開口下角ニ於テ測ル)ニ於テ股靜脈ノ外側ニ開口セリ。尙ホ淺腸骨廻旋靜脈ハ股動脈ノ後側ニ於テ大「ザフエーナ」靜脈中ニ入ル。淺腹壁靜脈及外陰部靜脈ハ之ヲ見失ヒタリ。

左側 (第2圖) 大「ザフエーナ」靜脈ハ鎌狀緣下角ノ稍々下方(鼠蹊韌帶下約7,5糎)ニ於テ近隣ノ靜脈並ニ副「ザフエーナ」靜脈ト合シテ1幹トナリ、次イデ右側ト同様、股動脈ノ外側ヨリ其ノ後側ヲ斜メ内上方ニ走り、鼠蹊韌帶下約3,9糎ニ於テ股靜脈ノ外側ニ開口セリ。尙ホ淺腸骨廻旋靜脈ハ鎌狀緣下角ノ高サニ於テ大「ザフエーナ」靜脈中ニ入ル。淺腹壁靜脈及外陰部靜脈ハ之ヲ見失ヒタリ。

第 1 圖

第 2 圖



即チ兩側共ニ大「ザフエーナ」靜脈ハ股動脈ノ外側ヨリ其ノ後側ヲ經テ股靜脈ノ外側ニ開口セリ。

大「ザフエーナ」靜脈ガ其ノ歸流部ニ於テ斯クノ如キ經過ヲトルコトハ極メテ稀レナルモノ、如ク、今日マデニ報告セラレタルモノ僅カニ足立教授ノ2例(他ニ未報告ノモノ3例アリ、合セテ5例ナリ)アルノミ。普ク文獻ニ涉リテ靜脈系統ノ破格ヲ蒐集シタル Krause (in Henle's Gefässlehre, 1876.)ニ於テモ、及ビ Giacomini (Memoria letta all' Accademia di Medicina di Torino, 1873.), Kosinski (Journal of Anatomy, Vol. 60, p. 131, 1926.) 等ノ下肢靜脈ニ關スル著ニ於テモ之ガ記載ヲ見ズ。又余ガ本邦人ノ下肢皮靜脈研究ノタメニ特ニ調査シタル77例(♂52, ♀25)ニ於テモ斯クノ如キモノハ1例モ發見セザリキ。

足立教授ノ5例ハ次表ノ如シ。此中、例Iハ東京醫學會雜誌(第10卷、317頁、明治29年)ニ、例IIハ Das Arteriensystem der Japaner (Bd. 2, S. 194, Kyoto 1928.)ニ既ニ掲載セラレタルモノニシテ他ノ3例ハ未發表ノモノニ屬ス。而シテ例I, III, IV, ノ3例ハ同教授ガ日本人ノ下肢602例(♂414, ♀188)ヲ調査シテ得ラレタルモノニシテ其ノ頻度ハ僅カニ0.5%ニ過ギズ。

例	屍 體 番 號	側	年 齡	性	備 考
I	259 (岡山)	左	27	♂	副「ザフエーナ」靜脈が股動脈ノ後側ニ於テ股靜脈ノ外側ニ入ル(大「ザフエーナ」靜脈ノ開口部ハ正常)、
II	703 (京都)	左	31	♂	
III	895 (同)	左	21	♂	大「ザフエーナ」靜脈ト外側股廻旋靜脈ト合シタル共同幹が股動脈ノ後ヲ經テ股靜脈ノ外側ニ入ル、
IV	909 (同)	左	28	♀	
V	2733 (同)	左	45	♂	

又余ノ例ニ於テハ破格ハ兩側ニ存スレドモ足立教授ノ5例ハ悉ク左側ナリ。

斯クノ如クコノ破格ハ極メテ稀レニ存在スルモノナルベシト雖モ卵圓窩及其ノ近隣ニ於ケル手術ニ際シテハ當然相當ノ顧慮ヲ拂フノ必要アルベク、又大「ザフエーナ」靜脈ノ歸流部ニ於ケル靜脈瘤ニ向ツテモ多少ノ關係ヲ有スルモノニアラザルカ。

撰筆スルニ臨ミ恩師足立文太郎先生ノ御指導ト御校閲トニ對シ滿腔ノ謝意ヲ表ス。